様式3

学 校 番 号

36

令和 5 年度　学校評価書　（計画段階・実施段階）

福岡県立須恵高等学校

自己評価

学 校 運 営 計 画（4月）			評　価（総　合）
学校運営方針	「校訓」・「五省」・「五心」を教育活動の根幹に据え、主体性・自律性の涵養を重視して、生徒の主体的な活動を促し、新しい時代に対応した教育活動を、進取の気風の下に創造することで、敬愛の精神と国際的視野を備え、何事にも高き理想をもって挑戦し、地域やグローバル社会で活躍する人材の育成を目指して、高い志と確かな学力・体力・豊かな心を育む。		A
昨年度の成果と課題	年 度 重 点 目 標	具 体 的 目 標	
・令和6年度入学定員が360名増えたが、志願倍率は1.23倍であった。多くの中学生が志願するような魅力的な教育活動が展開できた証である。生徒に寄り添う姿勢や安全で安心な学校づくりの感覚が浸透してきた。 ・地域探究を通して地域を支え、地域に愛される学校を目指し、さらに地域連携を充実させていく。 ・一人一台端末も導入され、授業改善に取り組むとともにICT文具を活用した授業内容の充実に努める。	(1) 安全で安心して通える学校環境づくり	・人権尊重を基盤に据えた教育活動の推進と道徳心の涵養 ・学校安全・学校衛生に係る取組の徹底	
	(2) 自律的な学修者の育成を念頭においた授業の展開	・学力の三要素のバランスある育成をめざす授業改善とそのための観点別評価の推進 ・ハイブリッド教育とICT文具を活用した個別最適化教育の構築	
	(3) 自尊感情や自己肯定感を高める生徒指導の推進	・生徒の主体的取組を促進し、自律性の伸長に資する学校行事・生徒会活動・部活動の運営 ・自分が大切にされていると生徒が感じるエンカレジングな生徒支援の推進	
	(4) 一人一人の生徒のキャリア形成と自己実現に資する進路指導の構築	・在り方生き方を考え、主体的に自己の進路を選択する力を育むキャリア教育の強化 ・生徒の希望と適性を生かす進路実現に向けた丁寧な出口指導の展開	
	(5) 認知的能力と非認知的能力のバランスある育成の重視	・学習の基盤となる基礎的読解力の養成 ・「総合的な探究の時間」を中心に、校内・校外での体験的活動を重視した生きた学びの創造	

評価項目	具体的目標	具 体 的 方 策	評価（3月）			次年度の主な課題
教務	授業改善の推進と生徒の確かな学力の定着	知識・技能の習得はもちろんのこと、思考力・判断力・表現力を育成する授業改善に向けた取組を更に推進する。	A	A	A	・ICTを用いた授業は増加しているが、個別最適化についてはやや不十分な状況である。研修の充実や授業実践の共有など、研修課と連携した取組が必要である。 ・考査振り返りの日の適切な運用について検討し、生徒に対して有効なリフレクションを促す。 ・考査の運用について各教科の意見が異なるため、教務課として調整し、最適な運用を図る。
		学習支援週間と連動して、生徒が日ごろの学習状況の振り返りを行い、自らが学びに向かう姿勢を改善できる機会を設定する。	B			
		観点別評価及び考査により教師、生徒双方向からの授業改善を進める。	A			
	遅刻者・欠席者の削減	各学年と連携・情報共有を図りながら、生徒が主体的に参加できる授業を展開するなど存在意義を高める手立てを講じる。	B	B		・遅刻・欠席者数が増加しており、生徒動態の数値化と情報共有を行うとともに、各学年や保健課等と連携を図る。 ・担任が欠課時数の多い生徒の把握が困難な状況にある。
		生活・学習習慣を見直す機会を設け、遅刻者の削減を目指す。	B			
	新学習指導要領の周知徹底	新教育課程の編成に基づき、教材作成等を推進する。	A	B		・新課程の授業については、各教科担当の先生方の努力に任せている状況であるため、教育課程説明会のフィードバック等を行うことで、教科を中心とした改定内容の周知を促していく。
		各教科・科目において、新学習指導要領の理解を深める。	B			
	校務支援システムの効率的な利用の推進	出席管理・成績入力に関わる作業の効率化や教員の負担軽減を図る。	A	A		・各種マニュアルを作成することができた。しかし、入力手順等にミスが散見されたため、マニュアルの改善を図るとともに、教務課職員で情報共有し、職員へのサポート体制を充実させる。
	日程調整、時間割の円滑な運用	各分掌と連携を図り、日程調整を円滑に行う。	A	A		・学校行事に関わる時間割変更が大きな負担となっており、また、授業時数のバランスも崩れる現状がある。 ・時間割のミスが最小限となるような業務手順を検討する。
		学校行事等にともなう時間割変更を円滑に行う。	A			
広報	キャッチフレーズ「あなたの夢によりそいます」を掲げた広報活動の展開による1.4倍以上の志願倍率の確保	オープンスクールを2回（8・10月）と部活動見学ディ（10月）を実施する。集約等はGoogleフォームを活用し、8月はオンデマンド型を継続する。	A	A	A	・引き続き十分な入学志願者の確保に努力する。
		生徒をピックアップした動画など、広報資料を整理して発信する。	A			
		組織的・計画的に中学校訪問を実施する。	A			
	地域の普通科高校としての「進取」に則った特色のアピール	HP掲載までの流れを整備し、積極的な情報発信を行う体制を維持する。	A	B		・進路相談事業では限られた情報の中でよりスムーズな運営を心がける。
		第4学区進路相談事業（8月）の円滑な開催に向けて取り組む。	B			
企画	式典等の企画・運営を効率化	式典における業務内容を改善し、効率化を図る。	A	B	B	・コロナが明けてPTA活動のあり方について再考していく必要があると考える。学校とPの連携が取れていなかった場面もあった。 ・よりよい職場環境を整えていくための準備を強化していく。
	PTA活動の効率化	生徒支援のために、PTA役員・委員会が活性化できるよう組織としての活動内容を創意工夫する。	B			
	職場環境の整備・改善	職場環境を整えるために全ての業務を全職員で分担できるよう企画する。	B			

学校関係者評価

評　価（総　合）	自己評価は A ： 適切である B ： 概ね適切である C ： やや適切である D ： 不適切である
A	

項目ごとの評価	学校関係者評価委員会からの意見
A	・遅刻、欠席が増加しているとあるが、コロナの影響やいろいろな要因が考えられるので、一概にその増加が悪いとは言い切れないのではないか？などと質問があった。 ・中学校でも授業改善は進んでおり、その現状をぜひ見に行ってもらいたい。その上で中学校と高校との授業の在り方やスタイルについて共有し、中学校と高校の接続を大切にして高校の授業改善を図ってもらいたい。相互の授業見学の機会を持てるようにできたらいいのではないか。
A	・来年度のクラス数が増加し、募集人数が増えたが、志願倍率は大きな変化がなかった。今後とも広報活動に力を入れてもらいたい。さらに学校の活性化を図ってほしい。
B	・昨年5月にコロナも五類に移行したので、PTA活動のさらなる充実をお願いしたい。

生徒	安全で安心な学校環境づくりといじめの撲滅	月１回のアンケートの実施、面談などを通していじめの未然防止・早期発見・対応に取り組む。	A	A	A	・登下校指導に関して、教員の負担軽減のため、年間3回（計9日）実施に変更した。更なる指導効果向上のため、指導状況の共有を図っていく。	A	・生徒たちの登下校の様子を見ていると、笑顔が多く見られる。学校生活が充実しているのだと思う。 ・須恵高校の生徒たちはよく挨拶をしてくれるが、一部の生徒は挨拶が十分でない。元気な挨拶ができる生徒たちを育成してほしい。 ・スマホの使用についてのルールとマナーの指導の徹底をお願いしたい。
		全職員による効果的な登下校指導のシステムを構築し、安全確保を図る。	B					
		交通安全指導、非行防止教室等、講演会等のより効果的な企画・立案を図る。	A					
	生徒会活動・部活動の活性化	生徒会を中心に、学校行事の工夫改善を図り、生徒の主体的な活動を支援する。	A	A		・生徒の主体的取組を重視して行事に臨み、主体性・協調性を育むことができた。しかし、特定の教員に負担が集中しており、ワークバランスとしては改善の余地が残った。 ・部室や活動場所の管理が徹底できていないことがあり、部長会のより効果的な運用が求められる。		
		部長会を定期的に開催し、健全な部活動運営を促す。	B					
		部活動加入率向上のための活動の見直しを図り、80%以上の部活動加入率を達成する。	A					
	ボランティア活動への積極的参加	生徒会を中心に学校全体をあげてボランティア活動への参加を呼び掛け、数多くの生徒の積極的参加を目指す。	A	A		・全校生徒全員へボランティアに興味・関心を抱かせることは容易ではなく、今後、簡易的なものから独自の取組の検討を継続して行っていく。 ・地域課と連携してボランティアの周知ができていなかった。		
		全校生徒が何らかのボランティア活動に参加できるような取組を実施する。	B					
	生徒の自律的態度の育成	校則の検討・見直し等を通じ、生徒の自主的・自律的態度を育成する。	A	A		・スマートフォンに関して、スケジュールの確認や学習時の使用など、生徒自身で使用法を工夫して使うことができるようになった一方で、歩きスマホや学習ツールとしてふさわしくない使い方をする生徒もいた。 ・年間を通じて委員会活動の効果的な運用ができていないものがあった。		
		生徒会を中心に、さらなる委員会活動の活性化を図る。	B					
	人権尊重に視点をおいた教育活動の創出と道徳教育の推進	人権教育・道徳教育HRだけに止まらず、生徒支援委員会とも連携し、日頃からの指導が浸透、徹底される取組を行う。	A	A		・いじめ事案が発生した際には、迅速な初期対応と組織的な対応を徹底する。 ・人権教育HRだけにとどまらず、日頃のHR、全校集会や学年集会などにおいても生徒の人権意識を深めらるような講話を行っていく。		
		生徒の人権意識の涵養を図る取組を充実させる。	B					
保健	生徒の情報の共有と組織的な連携の強化、及び生徒・保護者によりそう支援体制の確立	新入生の情報交換のための中学校訪問を実施する。（入学前3月）	A	A	A	・個人面談期間で、１人当たりの所要時間を計算した上で、適切な時間確保を教務課と連携して、設定する必要がある。 ・特別支援教育の充実を図るための職員研修を定期的に実施する必要がある。	A	・様々な地域から生徒が入学してくると思うが、生徒一人一人への更なる支援体制の確立をお願いしたい。 ・すべての生徒の満足度を高めるような取り組みをお願いしたい。
		個人面談週間を実施し、生徒の状況把握を行う。（4月）	B					
		生徒情報連絡会を実施する。（5月・9月）	A					
		特別支援の視点に立った学校環境の整備充実を図る。	B					
		行事前の健康相談、性と心の健康相談等、適宜スクールカウンセリングを実施する。	A					
	美化委員会・保健委員会の活性化	保健委員会による健康・安全意識の向上のための取組を企画、実施する。	A	B		・清掃時間の取組に差がある。時間を持て余す生徒への呼び掛けや美化委員を中心とした活動を実施することで、改善を図る必要がある。		
		美化意識の向上のための取組を企画、実施する。	B					
	全体的な環境美化意識の啓発	清掃区域の用具の整理および用具の充実を図る。	A	A		・生徒が自主的に清掃活動に取組むことができる環境づくりが必要である。 ・学校行事前の清掃活動（除草作業、美化活動）で清掃の意義を理解させるなど、年間を通して、定期的に意識向上のための機会を設ける必要がある。		
		自主的・自発的な校内美化の在り方を検討する。	B					
		古紙回収やペットボトルキャップの回収の推進等、リサイクルを推進する。	A					
	生徒、保護者によりそう支援体制の確立	特別支援の視点に立った学校環境の整備、充実を図る。	A	A		・支援や配慮を必要とする生徒の把握と対応について、教員間の連携をより充実していく。		
地域	須恵高校型の地域探究カリキュラム調整、地域との連携強化に向けた体制整備	連携協定4町を中心に地域と連携した地域交流・地域貢献活動を推進する。	A	A	A	・小学生との交流会および看護クラスにおける夏の看護実習を再開できたが、計画実施の遅れやPTAも含めた連携不足が課題。 ・次年度に向けて計画の見直しと交流会の会場数の検討が必要。 ・各学年の探究担当者のご尽力のおかげで各学年における総合的な探究の活動も何とか進めることができたものの担当者の業務負担の大きさが課題。適正な分担を図っていく必要がある。 ・コミュニティレンジャーの運営については依頼が一定期間に集中して重なったこともあり職員間の打ち合わせ等が不十分であったため運営体制の見直しを行う。また、3年生もボランティア参加できるようにしていく。	A	・ボランティア活動については様々な地域や行事でお手伝いをいただき感謝している。
		2年間を見据えた須恵高校型の地域総合探究のカリキュラム内容を整える。	B					
		看護総合探究を含め、高大連携により上級学校へのスムーズな学びの接続ができる環境を整える。	A					
		コミュニティーレンジャーの活動について、学校ホームページ上での活動募集の整備・活性化を図る。	A					
		「小学生との交流会」についてPTAと連携しながら、情報機器を活用した新たな運営体制の整備を行う。	A					

進路	進路実現に向けた組織的な進路指導の構築	生徒の進路実現に向け、各学年と連携を図り、実状に応じた進路行事（説明会・講演会等）を実施する。	A	A	A	・3年生の小論文指導・面接指導は学年所属を越えて全職員で実施し、成果は見られたが、改善の余地がある。 ・全職員での取り組みについては、事前に生徒に志望理由書を作成させる、面接における礼法指導を行う等、効果的な方法を考えていかなければならない。	A	総合型入試や推薦入試を受験する生徒が多くなっているが、一人一人の生徒の将来を見越した進路実現のために力を注いでもらいたい。
		3年生の受験に向け、小論文指導・面接指導を学年所属を越えて全職員に割り振り対応することで、質・量をともに充実させる。	A					
		小論文指導を通して、生徒の言語活動の育成・充実を図るとともに、受験方法として小論文・作文の書き方を会得し、錬成する。	A					
		資格・検定試験についての情報の収集、生徒への伝達に努める。	A					
	在り方生き方を探究するキャリア教育による社会人・職業人としての自立の促進	キャリアガイダンス等を円滑に運営し、生徒の職業観の育成、進路選択に対する意識の向上を図る。	A	A		・五省ゼミの時間の有効活用は進んだといえる。自学での基礎学力定着をベースとしながら、より効果的な活用を考えていきたい。		
		五省ゼミの時間を活用し、面接や小論文指導、放課後課外（3年）を効果的に実施する。また、適宜上級学校の講演会や模擬授業を設定する。	A					
		ポートフォリオ、キャリアパスポートの作成を行い、主体的に進路決定する力を育む。	B					
	進路情報の提供・活用・発信の充実	模試試験結果データの共有や進路結果分析を行い、生徒には得意・不得意科目を確認させ、生徒自身に進路実現に向けた当事者意識を持たせる。	A	A		・進路のしおりは年々充実度を増している。HR活動 での生徒の共通認識をもつ機会をもっと作っていきたい。 ・年2回の保護者会で、紹介ページの確認ができれば、保護者の進路意識の啓発に繋がると考えられる。 ・進路のしおりの更新を適宜行い、新しい情報を提供できるようにしていきたい。		
		進路のしおりの内容を精選し、ホームルーム活動等で効果的に活用する。	B					
		校内の掲示板や進路情報スペースを積極的に活用し、生徒への進路情報提供を充実させる。	A					
		ホームページを通して、進路ニュースの発行や、本校の進路に関する情報を、保護者や地域に向け発信する。	A					
情報	ICT機器活用促進のため環境整備	ICT機器の校内整備状況の共有に合わせ、効果的な使い方のシェアを行い、更なる活用促進を目指す。	B	A	A	・生徒一人ひとりへ配布されたChromebook、電子黒板を活用し、クラウドコンピューティングやSNSを通した授業を促進してきたが、まだ一部の使用に限られている現状にある。 ・Chromebookの充電設備環境の整理。置いたままにするか持ち帰るのかについて。	A	・様々な業務があり大変だと思うが、来年度は是非C評価を改善できるようにしてもらいたい。 ・小中学校とも連携してICTを活用した授業改善の推進を図ってもらいたい。
		「GoogleClassroom」、「Microsoft365」等の環境を整え、授業で幅広い選択肢を提供する。	A					
	学校全体でのICT教育の推進	定期的にICT指導力に関する調査を行い、全教員のICT活用状況を把握し、推進に向けてサポートする。	A	B		・業務のマニュアル化をほぼ行えていない。業務を遂行しても、そこで終わってしまうことがあった。次年度はしっかりと反省を踏まえた取り組みを行っていき、どの先生方も対応できるよう整備していきたい。 ・学習支援アプリケーションの一つとして無料版のロイロノートを試用している。来年度は有料版の導入となる予定である。さらなる利用推進のためにも研修会等を通して一つでも多くの授業での利用促進に繋げていきたい。		
		情報関係の業務をすべて情報課の先生でやってしまうのではなく、なるべくマニュアル化を行い、すべての先生で取り組める環境を整備する。	C					
		職員研修を複数回実施することで、全教員が一定のレベル以上で指導を行える体制を整える。	B					
		学習支援アプリケーションの活用推進等を図ることで、ChromebookとBYOD端末との差別化を図る。	A					
	情報漏洩や紛失、焼失のない、適切な情報管理	職員・生徒の個人情報の取り扱いについて理解を深め、個人情報の保護を徹底する。	A	A		・個人情報漏洩そのものはなくても、個人情報漏洩に繋がりかねない事態への意識付けをさらに深めて行きた。		
研修	生徒の学校満足度を高めるための教育活動の在り方の探究と、他の校務分掌との連携による取組の創出	授業改善に向けて、各校務分掌・各教科・各課との連携強化と、職員研修の実施により、教育活動の支援の充実を図る。	A	A	A	・職員研修の効果的な実践に向けて、内容の充実を図っていく。また、教科だけでは生徒の支援に向けた取り組みが必要である。情報課との連携や先生方の教育活動の支援充実を更に高めていきたい。セミナー研修については、来年度9クラスのことを踏まえ、日程や内容の見直しに務める。教務との連携を図る。	A	・人材育成の観点から、今後職員研修の内容の更なる充実を図り、特に若手の先生方の育成をしてもらいたい。 ・中学校の現状を先生方が知ることにより、高校へスムーズに移行できるように中学校との交流を進めてもらいたい。
		情報課と連携しながら授業改善に向けた新たな取組を提案し、公開授業週間等を活用して実践の支援を行う。	A					
		セミナー研修等を活用し、生徒の主体性な活動に対する支援を行う。	B					
		研究紀要の内容充実を図り、教育実践を共有する。	A					
	校内での多様なアンケート等による教育活動の把握	学校満足度調査・授業改善アンケートを実施し集計結果を共有することで授業改善に資する。	A	A		・1学期の授業改善アンケートの反省を踏まえ、直ぐに2学期は対応し取り組めた。来年度、学校満足度調査について、生徒課との連携をはかる。		
	図書館利用の活性化	図書委員による読書推進のための取り組みを充実させる。	A	A		・図書委員の活動が生徒主体となる取組みになった。岳城祭では新たな活動を入れ学校全体として図書活動の充実を図ることができた。今後は、広報活動を更に十実していきたい。		
		効果的な選書と廃書を行い、蔵書の整理に努める。	A					
		図書館の環境整備に努め、利用マナーの向上と利用の促進を図る。	A					
		広報活動を充実させ情報提供に努める。	A					

第一学年	基本的生活習慣の確立	あいさつや時間の厳守、掃除の徹底など、自ら判断し、行動に責任をもてるようにする。	B	B	A	あいさつについては，セミナー研修や学校行事、日々のHRをとおして自分から行える生徒が増えつつある。しかし、なじみのない教員や外部の方に対するあいさつの雰囲気がいまひとつである。生徒会や学年生徒会の取組みをとおして、自分からあいさつするのが当たり前という雰囲気を作っていきたい。	A	・コロナとともに中学校へ入学し、様々な制限のある3年間を過ごして高校へ入学してきた学年である。心身に不安を抱えている生徒もいると思うが、充実した高校生活を送れるように支援してもらいたい。
		場に応じた礼法の習慣化や適切なあいさつを通して良好な人間関係の構築に努めさせる。	B					
		特に学校行事をとおして周囲と協働する大切さを実感させる。	A					
	自ら進んで学びに向かう生徒の育成	基礎的基本的な知識・技能の定着のためにICTを有効活用する。	A	A		ICTの活用については、1学期までは使いこなす力にばらつきがあったが、粘り強く指導していく中で徐々に各教科ごとの活用方法が生徒たちに浸透していった。五省ゼミでは類型選択をはじめ、日々の悩みを丁寧に聞き取り、適宜アドバイスを行うことで信頼関係を構築した。ボランティアの機会が少なかったため、地域課と連携を図っていきたい。		
		個々の目標到達度や悩みを把握して適切な助言を行うため、学習支援週間や五省ゼミを活用する。	A					
		部活動やボランティアも学びの場であるため、積極的に参加させる。	B					
	成功体験の積み重ねと自己肯定感の醸成	考査や学校行事、各学期についてふり返りスライドを作成するなど事後指導を充実させ、頑張った点を自分で認識できるような働きかけを行う。	A	A		文化祭の学年合唱や体育祭、考査や各学期に関してのふり返りとしてスライド等でデータ保存させた。次年度は各行事等の良いタイミングで今年度作成したものを見返し、前向きな動機付けに役立てたい。		
		他者と協働して学校行事等に取り組み、多くの成功・失敗体験を通して、客観的な判断力や実行力を育成する。	B					
	教員・分掌・事務室の協力体制と保護者との連携強化	配慮を必要とする生徒に対して、関係職員やスクールカウンセリングをはじめとする各関係機関との連携を図る。	A	A		コロナ禍の中学校生活を送ってきた41期生であるが、オリエンテーションをはじめ学年団の共通理解のもとで指導にあたることができたため、スムーズにスタートさせることができた。集団生活が難しい生徒についても丁寧に保護者と関係を築き、納得した形で次の段階へと送り出すことができた。		
		学年団や各分掌・事務室と情報を共有し、保護者との信頼関係を築くことで生徒の安全・安心な学校生活に還元する。	A					
	職業観の充実や自分の進路に対する意識の向上	学習支援サービスを利用して、模試の有効活用のため、学習の記録やGTZ目標設定機能を使用する。	A	B		学習支援サービスについては模試や考査の前に活用を促すことができた。徐々に日常的な活用に移行していく必要がある。総合的な探究の時間については、進め方が若干難しいところがあったため、次年度はカリキュラムと目的の再整理と地域課・学年団の共通理解を図っていきたい。		
		日々の授業や部活動が将来の生き方・在り方につながっていることを適宜伝える。	B					
		総合的な探究の時間やキャリアガイダンスをとおして職業観を育み、自己の適性について考えを深めさせる。	B					
第二学年	自ら進んで学びに向かう生徒の育成	五省ゼミ等を活用し、学習習慣の定着を図り、各教科の知識・技能の定着を図る。	B	A	A	・五省ゼミは、計画的に実行できた時期と流動的な実施があり、効果的に実施ができなかった。次年度は、学期単位で計画を立て、効果的な時間になるように改善したい。 ・個別面談等を通して、自走する生徒が出始めたのはよかった。より多くの生徒が自走できるように取り組んでいきたい。	A	・最上級生として学校行事などをぜひ成功させてほしい。 ・次年度は最終学年として第一希望進路の実現に全力で取り組んでもらいたい。また、年内に進路が決まる生徒が多くなったと報告があったが、進路決定後の指導も是非充実していってほしい。
		学習時間の調査や個別面談を行い、次に向けての課題を明確にして、自主的に取り組めるようにする。	A					
	主体的に行動できる生徒の育成	あいさつや時間の厳守、掃除の徹底など、自ら判断し、行動に責任をもてるようにする。	B	B		・挨拶や掃除については、まだ改善の余地がある。最上学年として、生徒会を中心に、改善していきたい。 ・学年生徒会を中心として、学年集会等の運営ができた。継続した取り組みができるようにする。		
		学年やクラスにおいて、自己の役割を認識し、責任をもって活動できるようにする。	B					
	進路意識の向上	模試の事前・事後指導を行い、自己分析を通して、進路実現に向けた目標設定を行う。	B	A		・模試の結果にこだわりを持ち、事前学習や事後の復習に取り組む生徒が多く見られた。進路実現に向けて、より実力を伸長できるように各教科と連携していく。 ・総探での活動を進路実現に繋がるように検討していく。		
		総合的な探究の時間やHRを通して、職業観を育み、継続的な探究活動を行い。進路目標を明確にできるようにする。	A					
	成功体験の積み重ねと自己肯定感の高揚	学年生徒会や委員会の活動を通して、集団における達成感を共有し、自己肯定感の高揚を図る。	A	A		・行事等でリーダーに積極的に立候補ができている。次年度も積極的に立候補できるように声掛け等を行っていく。また、各行事や活動の中で、生徒一人一人が充実感や達成感を感じられるようにしていきたい。		
		行事等において、ポートフォリオを蓄積し、活動における充実感や達成感を味わえるようにする。	B					
	教員、分掌、事務室の協力体制と保護者との連携強化	学年団や各分掌・事務室との連携を図る。	B	A		・学年団や各分掌との連携が不十分なところがみられた。そのため、業務の偏や内容の調整が必要になった。連携を強化して、協力体制を築いていきたい。		
		保護者に対して情報発信を行い、連携を密にできるようにする。	A					

第三学年	第一希望進路の実現	学力向上のための指導体制を強化し、学びの活性化を図る。	A	A	A	・複雑化した受験形態の周知徹底と出願前のチェック体制を工夫すべき。 ・進路目標を高く設定するよう声かけがもっと必要であった。 ・進路関係の取り組みについて他学年の先生方への周知を丁寧にすべき。 ・放課後課外への取り組み方について指導を徹底すべき。 ・模試の受験について共通認識をもつ必要があった。 ・「五省ゼミ」を2学期末まで実施したが、生徒の取り組みは良好だった。	A	・文化祭や体育祭などを見たが、3年生が中心となって素晴らしい学校行事を作り上げていると感じた。昨年までコロナ禍で経験も資料などもなく前例がない中、よくやったと思う。
		進路実現に向け情報の共有を図り、個々に応じた支援を行う。	A					
		学習支援サービスを活用し、個別学習や模試等の事前・事後学習の徹底を図る。	B					
	「五省」の完成	五省の実践を常に意識させ、TPOを弁えた的確な行動ができるよう支援する。	B	B		・五省についてもっと粘り強く継続的な指導が必要だった。 ・学校行事や部活動等への積極的な取り組みと、五省の習得を上手く関連付ける指導を工夫すると良い。 ・自立に向けたアプローチは卒業まで継続する。		
		成人に向けての規範意識を確立させるとともに、自立する力を習得させる。	B					
		部活動や諸行事を通して自己肯定感を高め、向上心をもって学校生活に臨めるよう支援する。	A					
	最上級生としてのリーダー育成とフォロワーシップの醸成	学校行事を生徒主体で運営できるよう環境を整え、スキルを身につけさせる。	A	A		・学校行事に熱心に取り組む生徒が多く、失敗を繰り返しながらも成長した。支援する体制作りにも力を入れたが、連携をうまくとれるよう一層の配慮が必要。 ・生徒が意欲的に考え、主体となって行動することで学校全体を変えるきっかけを作ることができた。この姿勢を今後も継続すると良い。		
		協働活動を通し、多様性を認め合い、個々が活躍できる環境を整える。	A					
		様々な活動に積極的に参加し、成功、失敗体験を数多く経験させ、人間性を高める。	A					
	教員・分掌・事務室との協力体制と生徒・保護者との連携強化	学年団、各分掌、事務室との連携体制を強化する。	B	B		・学年団の連携強化に努めたが、他学年への情報共有が不十分な場面があり、考慮が必要。 ・生徒の状況把握と情報共有、早期対応を徹底すべき。 ・経済的配慮が必要な生徒への支援体制を整えることはできた。		
		保護者との連携を密にし、安心・安全な学校生活を目指す。	B					
		経済的・社会的配慮が必要な生徒への支援体制を整える。	A					

自己評価及び学校関係者評価を踏まえた今後の改善策

・本年度の重点目標の継続・発展・進化。
・中学校との相互授業参観等を実施し、中学校との接続を考えた授業改善に取り組む。ICTを活用した授業スタイルの進化。
・地域とのさらなる連携を強化し、地域に愛される学校づくりを行う。

評価項目以外のものに関する意見

・教職員の健康状態について心身の不調を訴える職員や超過勤務の多い職員に対してのフォローをしっかりと行ってもらい、先生方が元気に過ごしてもらいたい。
・18歳成人を迎える3年生への指導や働きかけを行ってもらいたい。